

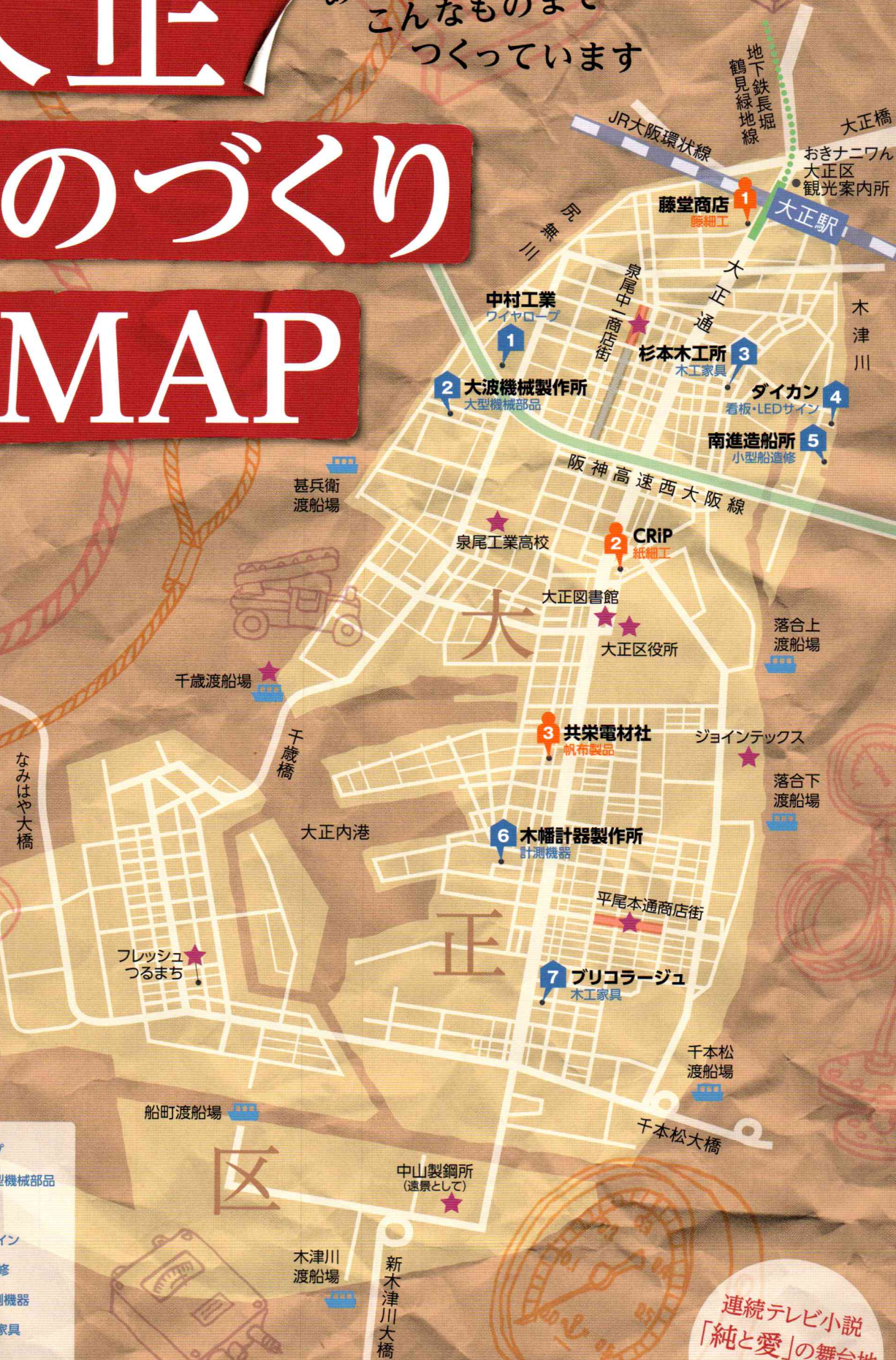
大正

あんなものから
こんなものまで
つくっています

ものづくり

MAP

- 1 中村工業 ワイヤロープ
- 2 大波機械製作所 大型機械部品
- 3 杉本木工所 木工家具
- 4 ダイカン 看板・LEDサイン
- 5 南進造船所 小型船造修
- 6 木幡計器製作所 計測機器
- 7 プリコラージュ 木工家具
- 1 藤堂商店 漆細工
- 2 CRIP 紙細工
- 3 共栄電材社 帆布製品



大阪市大正区

連続テレビ小説
「純と愛」の舞台地
★ここで撮影が
行われました。

大正区を支える

ものづくりの

現場

昭和7年(1932)に発足した大正区は、

周りを海と川に囲まれた水運豊かな島でもある。

かつては、大きな貯木場に鉄鋼所、自動車工場や造船所などが集まり、

「けむりの街」の中核をなす工業地帯だった。

現在でも、区内の多くの企業がものづくりの伝統を守り続けているが

重厚でハードな製品から、今を感じさせる柔らかいタッチの商品まで実に多種多様だ。

※工場見学ご希望の方は、事前に各企業へご確認ください。

ワイヤロープ

大正で生まれる命綱が、
産業を繋ぐ。



まさに、ものづくりの命が紡がれる瞬間。丈夫だけでなく、サビにくく汚れにくい、水辺の工業地ならではのロープ開発にも意欲的



●大正区泉尾6-5-40 ☎06-6551-3390
<http://www.ropo.co.jp>

1 中村工業

直径2cmほどのワイヤが火花をあげて切断された。そのワイヤを「ロープ加工技能士」の国家資格を持つ職人二人が何本も手作業でより合わせ、直径8cmもの極太のワイヤロープに編み上げていく。この太さでなければ、80tもの重いテラボッドは吊り下げられない。

「産業の命綱」と呼ばれるワイヤロープ。建設現場や港湾、工場などでは欠かすことのできない存在だ。中村工業は、そのワイヤロープ加工で国内有数の技術を持つ会社である。現場によって必要な長さや太さ、吊り下げる重量などはすべて違うからこそ、北海道から沖縄まで全国に広がる顧客のさまざまなニーズに合わせた商品を提供することが身上だ。情報発信にも力を入れており、インターネット黎明期の1997年にはいち早く会社のホームページを設置。最近ではツイッターやフェイスブックも開設している。

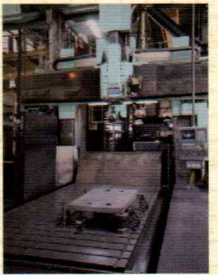
2 大波機械製作所

得意とするのは大型機械の部品製作。電力会社の巨大なガスタービンのケースなどを作っている。「大正区に住んでいる人の多くが使う電気も、うちが部品を提供した発電機で作られているはずだ」と太田恭弘社長。近年ではスマートフォンのタッチパネルを作る機械にも部品が使用されていて、実は沢山の人が間接的に大波機械の技術に触れているのだ。

一方で、グローバル化の波は大正区にも押し寄せ、その変化への対応が課題だ。「数年前までは液晶テレビ関連の受注が大変多かったのですが、その需要はほとんど韓国や中国に移転した。同じ物では競争に勝てない。付加価値の高い製品をどんどん開拓しないとね」。強みは、素晴らしい技術を持った若いオペレーターが育っていること。どんな形にも加工できる、NC工作機械と技術力で、顧客の難しい要望を解決する。

●大正区泉尾7-5-47
☎06-6552-5115
<http://www.oonami.co.jp>

発電機から航空宇宙まで、実績の幅広さは大阪でも屈指。柔軟な思考を持つ社長と若きオペレーター集団は、さらに可能性を広げていく



大型機械部品

肝心要は、
大きなマシンの
小さなピース。



木工家具

木材の街・大正のDNAが
息づいている。



3 杉本木工所

木 津川の河口が近いことから水運が発達していた大正区には、かつて多くの材木問屋があり、良質な木材を手に入れることができた。そのため、今も木材を加工して家具を製造する会社が少なくない。昭和2年(1927)創業の杉本木工所が得意とするのは、企業や店舗のエントランスなどに置かれる特注の家具製作。熟練の職人が床や壁の内装工事も引き受け、天然木を使用した家具とともにクオリティの高い空間を作り上げる。

三代目社長を務める杉本晃一さんは「優れた製品を生み出す高い技術力と、大阪市内にあることの機動力が強みです」と語る。昨年からは、家具製作時に出た端材を組み合わせた新しい製品ブランド「Dage」をスタート。木製の名刺入れやオセロなどの商品を取り揃え、2012年のグッドデザイン賞を受賞した。今後は有名百貨店やインターネットでの販売を展開し、事業の一つに育てていく。



端材とはいえ、主要ラインで用いられる「Dage」の素材は折り紙つき。そのクオリティを楽市場で気軽にネット購入できるのは嬉しい



●大正区三軒家東5-9-18
☎06-6551-2684
<http://www.sugimoku.jp>



日本の歴史と共に歩んできたような老舗企業。ものづくりの系譜を大切にしつつ、新しい風も進んで取り入れる姿勢も併せ持つ



大正ひいては島国日本の心臓そのもの。

小型船造修

5 なんしん 南進造船所

創業400年もの歴史を誇る老舗企業は、朝鮮出兵に向かう豊臣秀吉が軍船を作るため、現在の石川県から呼び集めた船大工がルーツだ。大正4年(1915)に現在の木津川沿いにある工場へ移転。昭和になると、洋服ボタンの材料にする黒蝶貝を採る船を、南洋のアラフラ海に派遣していた。昭和20年(1945)の大阪大空襲では工場と船が全焼するが、見事に復興。今は大阪府や市が持つ船の修理やメンテナンスを中心に、海上保安庁の巡視艇の保全なども行っている。

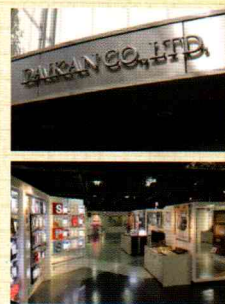
敷地には、かつて100人以上の職人が過ごした宿泊所や大食堂が残り、造船所を舞台にした連続テレビ小説「やんちゃくれ」のロケ地にもなった。昨年には大阪市立大学と共同で、世界初の「実用化プラグインハイブリッド船」を開発。排ガスや騒音を出さないので、観光船への利用が期待されている。



●大正区三軒家東3-3-13
☎06-6551-1253

4 ダイカン

「シヨールームを訪れた地元の方の多くが、『大正区にこんな会社があったんや』と驚きます」と笑うのは二代目社長の仁義修さん。鉄道会社や百貨店などの国内大手企業、海外一流ファッションブランドの店舗を飾るサインやディスプレイを数多く製作する。同社が開発した、金属にしか見えない質感と輝きを持つ樹脂製の看板「タフライトサイン」は、業界に大きなインパクトをもたらした。2010年にはベトナムに工場を設立し、グローバルなビジネスも展開する。話題になった映画やテレビドラマのセットも手がけている。国内サイン業界の筆頭となった同社のポリシーは、「オリジナリティへのこだわり」。1970年代のオイルショック時には、看板の素材をプラスチックから石や金属、木やガラスに切り替えて話題になった。現在の主力商品であるLEDを使った美しいサインを携え、「匠の技とハイテクの融合」を旗印に、斬新な看板を生み出している。



●大正区三軒家東3-1-7
☎06-6551-2020
<http://www.daikan.ne.jp/>

看板・LEDサイン



あのブランド下のサインも、メイド・イン大正でした。

積極的に高卒の若者を採用し、早い段階から職人技を伝授していくのがダイカン流。新素材開発への貪欲さも若者には魅力だ

木工家具



新しいのに身になじむ、大正発の素材感。



2006年の第24回朝日現代クラフト展に見事入賞。温かなデザインは、企業の顔から、デザイン、製作まで担う家族経営から生まれている

7 ブリコラージュ

ハンドメイドの雑貨や木のおもちゃ、家具などを扱うセレクトショップ。その始まりは、小さな街なかの家具工房時代までさかのぼる。腕の良い家具職人として老舗工作所にいた創業者が独立。細工の難しい特注家具作りで培った腕を活かし、現在まで50余年にわたって家具を作りつづけている。二代目からは住宅や店舗の設計も手がけ始め、ものづくりの幅は家具だけでなく空間にまで広がった。テーブルや椅子はもちろん、建物と一体となった作り付け家具などの大型家具も得意とする。

店名の「ブリコラージュ」とは、フランス語で「身の回りのありあわせの材料で手作りする」という意味。すでにあるものを予想もしない使い方をすることで、新鮮な驚きと創造性を生み出したいという思いが込められている。2Fのギャラリースペースでは、コンサートや展覧会、楽器作りなど様々なワークショップも開催している。



●大正区南恩加島2-11-17
☎06-6551-4180
<http://www.bricolage-factory.com/>

6 こばた 木幡計器製作所

水や油、空気の圧力を測る「イカリ」マークが目印の圧力計は、船舶や工場、上下水処理場など、多くの場所で使われている。明治42年(1909)に西区の鞆で創業し、当時まだ国産メーカーがほとんどなく、輸入に頼っていた「ブルドン管圧力計」に注目。家業だった金物製造の技術に応用し、研究を重ねた結果、製作に成功した。品質への信頼から、日本海軍の護衛艦にも採用されるほど。

戦災で工場が焼失してから、現在の南恩加島に移転。創業から手がけるブルドン管圧力計は、今も主力商品の一つだが、最近では取り扱う計測機器もバラエティ豊かに。たとえば、得意としてきた高い圧力を測る計器に加え、食品工場や手術室など、クリーンルームを管理する低圧力計測機器の開発にも乗り出している。顧客からの要望に応じて、一点から製作を請け負うことも多いとのこと。



技術者の若さが木幡計器の特徴であり、強み。作業中ともなると一人一人が製作デスクに向かい、細かい手作業に黙々と専念する



●大正区南恩加島5-8-6
☎06-6552-0545
<http://www.kobata.co.jp>

計測機器

この精密さが業界を左右しています。



●大正区千島2-2-14
☎090-1910-6986
http://www.facebook.com/hikokami

2 CRIP
坂口雅彦さん

2012年には、鶴町にあるIKEAでライブパフォーマンスを行い、多くの人々が見守る中で体長3mもの巨大龍を完成させたことも

紙細工



喜ぶ子どもの顔が一番の答え。

平尾本通商店街に新しい名物ができた。区内外の若者がポーズを決めて記念撮影するその正体は、段ボールでできた巨大シーサーだ。「学校帰りの子どもたちが、通りかかっちはシーサーの鼻をこすっていく。『鼻をなでると願い事が叶う!』って(笑)。嬉しそうに話すのは、生まれも育ちも大正区の坂口さん。段ボールの大型作品だけでなく、小さなペーパークラフトからパッケージデザインまで、紙のことならおまかせの紙細工師だ。「大正区で頑張っている人を応援したくて、幼い僕の遊び場だった、鉄工所や貯木場を思い出して図面を引きました。大正ならではの鉄と木の神さんです」

要るものや発想は現場から生まれる、と坂口さん。区内の商店街を盛り上げようと足繁く通っては、作品にも反映していく。「段ボールのテーブルと椅子で、路上カフェなんてどう?。アイデアの泉が枯れることはなさそうだ。

大正区

職人

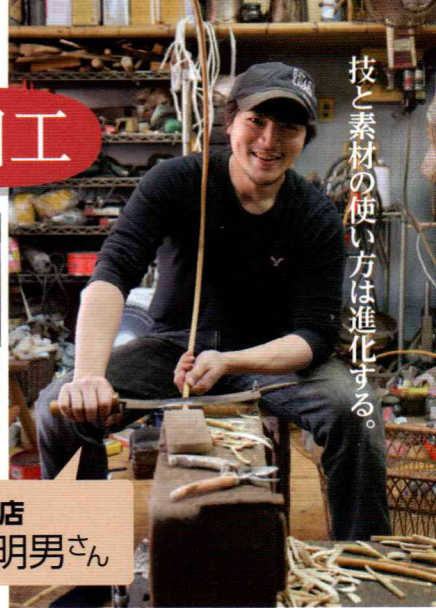
匠鑑

帆布製品

籐細工



インドネシアから仕入れた籐は、熱を加えるとしなやかになって加工しやすくなる。輪にして袋口の芯にしたり、編んで椅子の背もたれにしたり



技と素材の使い方は進化する。

1 藤堂商店
藤堂明男さん

「昔の三軒家には、木材業者や籐職人がたくさん集まっていたんですよ」と教えてくれたのは籐一筋の四代目。大正駅近くにある仕事場の入り口には、日本製からデンマーク製まで、破れた籐の修理を待つ椅子が並ぶ。籐職人が減っていく中、藤堂さんの腕を頼って全国から集まったものだ。「ご年配の方だと、古い椅子に新しく籐を張り替えては、また大事に使われることが多い。旅館でも年季モノを愛用してもらっています」

現在は北欧家具のブームで若者にも大注目。椅子や籠の修理が主だが、籐のある生活を提案した室内リフォームや、木材と合わせたオリジナル家具の製作も。「家具屋や木材屋の跡継ぎ同士で集まったりもします。そういうネットワークから新しいブランドが生まれたら嬉しいですね。伝統の中に若さがのぞくデザインを、と意気込みを語ってくれた藤堂さんだった。

●大正区三軒家西1-17-7
☎06-6551-4417
http://www.rattan4u.com



3 共栄電材社
飯森淳彦さん



道具置き場には、たくさんのお版が保管されている。「これも区内の企業で作ってもらって、一個一個シルクスクリーン。プリントゴッコみたいなもんです」

今日も作業員たちの安全を支えている。

取引先は、主に電力会社。丈夫な帆布で、電気工事に携わる人々の工具入れや、工事の際に必要なフラッグを製作している。袋の縫い合わせからフラッグの文字入れまで、すべて飯森さん自身による手作業。数個の発注なら翌日には納品可能な仕事の早さも売りだ。「父の仕事を見ながら育て、面白いなと思って継ぎました。「こんなんでできる?」って聞かれて、あれこれ考える時間が一番楽しい」

工具入れの袋は意外に軽い。「重くないよう、袋口に鉄芯はNG。藤堂商店さんの籐芯を入れてます」。材料の帆布やウレタンも区内の企業から調達している。まさにメイド・イン大正。「もともと西区の事務所を改装する間だけ大正区にいたつもりでしたが、居心地が良すぎてどうしようかなと(笑)」。ご近所付き合いも絶好調。大正区のものづくりは、人情とネットワークに支えられているのかも。

●大正区小林西1-4-7 ☎06-6555-2135



ものづくり探訪の合間に、そんな大正区の素顔もぜひ探してみてください。

海と川に育てられた仕事場、大正アイランドを味わう。

島と呼ばれる大正区は、水辺の街です。かつて大阪市内で活躍していた渡し船は、その多くが廃止される中で、現在は8カ所のうちの7つが大正区民の足として人々を運びます。また、沿岸には工場が立ち並び、国内でも有数の貿易基地だった大正内港には、「けむりの街」の名残を留めようと、区外からもカメランが続々と。夕暮れ時に浮かび上がる船や橋のノスタルジックなシルエットに、シャッターを切らずにはいられません。どこか味深い深い大正区の人情も、この海と川に開かれた工場の街で育まれました。今も昔も変わらない、ものづくりに対する職人気質と、親しみやすい下町の活気。大正区を訪れた時にふと懐かしさを感じるのには、「けむりの街」の記憶がよみがえるからかもしれません。